

○クリスマスローズが咲きだしました。春がそこまで！お変わり在りませんか…。万年文学青年—自称の亡き父とあなたが重なってしまいます。何故かうつむいて咲くクリスマスローズが嫌いな人だった事を思い出してしまう今の季節です。 ホットマン 2015.3.6



●こんばんは。クリスマスローズをネットでたくさん見ました。確かに親に叱られた子どものようにしよげて「うつむき」かげんの花ですね。ときどき立派過ぎて細い枝に支えられずぐったりうつむいた薔薇を見ますが観ていて辛いです。とても花びんには活けられません。 けいじくん 3.6

余談ですがプレーボーイという橙色の一重のバラをご存知ですか？—昨年、鹿屋バラ園で500円で切り株を買い鉢植えにしました。○でした。棘が無かったら薔薇には見えない可憐な薄い橙色の花が次々に咲きクリスタルの細い花びんにぴったりでした。何が良いつてその葉っぱのツヤです。ツヤ出しスプレーを吹き付けたように花なしでも○でした。ところで僕もクリスマスローズはゴメンです。今度花屋さんに観に行ってきます。御家の花は何色でしょう。

○ 鹿屋バラ園ご一緒しましたかしら？内之浦とか…一昔前になりますね。オレンジの一重がプレーボーイとは、花屋で探してみます。マイクリスマスは濃いパープルと若草色、こぼれ種から広がって□何時までもさいていますね。此れからです。チョコレート色が欲しいのですがなんと無く時間が過ぎてしまいました。何故か好きなのです。私みたいでしょ？----- ホットマン 3.7

○ 美しい花色。探して見ます。??夫人もショックから???花談義たのしいでした。 ホットマン 3.7



○ チョコレート色のクリスマスローズ見つけて来ました。

あるものを見ると**ある人の顔**がすぐに浮かんでくることがある。あるものといってもいろいろあって音楽（メロディ）の場合もあれば食べ物の場合もある。

ある場面—たとえば、風呂に入った瞬間とか、車を運転していて特定の（わけもわからない）曲がり角にさしかかるその一瞬、**ある特定の知人の顔**がパッと頭に浮かんでくることがある。

脳の何処かの部位がフラッシュバックする。文字通り（一瞬）の場合もあるが、そのまましばらくその**知人**との邂逅かいこうに耽る時もある。

先日、高校3年のクラスメートだったホットマンさんから以下のようなメールが届いた。

ぼくとクリスマスローズが重なった（直接にはなくお父様を介してだが）そうで、この場合「光栄ですよ」と喜んでいいものかよくわからないが、参考までに届いた携帯メールを書いてみる。

〇クリスマスローズが咲きました。春がそこまで！お変わり在りませんか…。

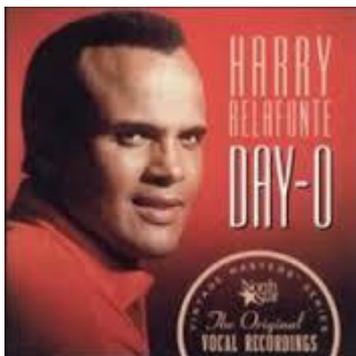
万年文学青年—自称の亡き父とあなたが重なってしまいます。何故かうつむいて咲くクリスマスローズが嫌いな人だった事を思い出してしまう今の季節です。 ホットマン 2015.3.6

下を向いて咲く花が嫌いだった父、そのお父様は自称万年文学青年だった、そのお父様を思い出すと僕が重なるということらしい。これはもう、ホットマンさんの勝手な想像で、どちらかと言うと、芥川龍之介や太宰治のようなマイナーな男性像（うつむいたイメージ）を好意的に思っているのかな、と勝手に思ったりもする。

ここで書きたいことはホットマンさんとのやりとりにはまったく関係ないことである。ただひとつの文章がヒントになって自分のことで考えてみたことである。

一何かを観ていたら、心と脳裏に特定の人顔が浮かんできた。という文章についてのつまらない考察—とりわけ僕の場合はメロディと**ある人の顔**は重なることが多い。

自前のカーステレオから流れてくる楽曲に乗ってアトランダムに登場する懐かしい友人たちとの思い出に耽るのはたのしいことである。思い出すままに何名か名前をあげてみたくなった。



『さらばジャマイカ』—ハリーベラフォンテを聴くと小・中・高、通しの友人・市来龍作のあのころの顔と共に鹿児島駅前の音楽喫茶「エデン」が、そしてダブるように当時登場したばかりの33センチLP盤が脳裏に浮かんでくる。

この曲は1956年（昭和31年—ぼくらが高校1年とき）に登場した「デーオー、デーオー」のかけ声で始まるヒット曲『バナナポート』LPの3曲目に入っていた。ハリーベラフォンテのこのアルバム『カリプソ calypso』はビルボードアルバムチャートを31週1位を続け、LPアルバム史上初のミリオンセラーになった。

実は当時は歌を覚えるのに英語の歌詞は見ないでシンガーの言葉をなぞって憶えていたのでこの曲も長い間まちがって唄っていた。

ダンザ、ウェイオブ、ナイトゲン、アンダ、サンシャイン、デリオブア、マンティトップ……

正確な歌詞はこうだった。(ずいぶん違っている)

Down the way where the night are gay and the sun shine daily on the mountain top//



『ブルースを唄おう』—ガイミッチェル—と『雨に歩けば』—ジョニーレイ—が流れると中学時代からのぼくの悪友(とても親しかったという意味で)有村文之の口ずさむ顔があらわれる

長田中ではマラソン選手として活躍しアイドル歌手の守屋浩に似ていた。シチュエーションとしては、決まって文之が結核を患って入院していた照国神社の横の高岡病院の病室である。ふたりで交わした会話まで浮かんでくる。

当時、照国神社の左側の坂道にはネオンがまぶしいラブホテルが軒を連ねてあった。いまでこそマイカーで利用される—そうだ—が当時はまだほとんどのカップルが寄り添って(なぜか—わかるけど—足早に)中に入っていた。入り口で躊躇する女性の様子などが彼の病室からよく見えるらしくその様子をオーバーに語る彼の顔が浮かんでくるのだ。病院の門限がなかったらぜひ観察したいと思った(にちがいない)ものだ。

しばらく有村の顔に重なるようにかれの彼女たちの顔が2, 3人(ときどきは名前も)浮かんでくる。皆、美人で可愛く横取りしたいくらい羨ましかった。彼の愛したスケたち—(親しい友だち同志では恋人のことを「おいがスケ」、「わいがスケ」という呼び方をしたものだ、どちらかという2人称(相手によく使った)—ただこうして今、文字で書くほどはスケという言葉は当時は女性蔑視のつもりはなくむしろ誇らしげで、秘めた響きがあったものだ。たぶん、多くの純真な玉龍仲間は「いや、ぼくは使ったことはない」と言うかも知れないがぼくらシティボーイ(のつもり)のまわりでは、このやくざ言葉のような云い方は結構、使われていたと思う。

「はくい」という形容詞をつけて「はくいスケやっど」と云う風な使い方も流行っていた。「はくい」はその他の名詞にも「美しい」「カッコいい」といったような使い方だったような気がする。



大平博美も小学校の5, 6年から中・高・大人(東京で1年間—思い出すのはナンパばかり)までの「わが青春の軌跡」すべての期間無二の仲良しだった。顔にダブるメロディはまず三橋美智也の『愛ちゃんはお嫁に』なのは何故なんだろうか。唄っている場所は横浜の綱島のアパートである。(三橋美智也が売れる前に綱島温泉の火焚きの仕事をしていたとは聞いていたけど)

もう1曲ぐらいあるだろうといえばあった。アンソニーパーキンスの『月影のなぎさ』だ。ぼくも好きな曲だった。やはりひろみの口から出てくる音楽はこれしかない。

博美は故郷宮崎に帰ってお父様の仕事の跡を継いで鉄道郵便の職につき仲間とハワイアンバンドを作って楽しんでいただけだ。小中高と彼は自慢の長髪を73に分け、ポケットにはいつもポマードの匂いのする鬘甲の櫛を持っていた。櫛の色まで浮かんでくる。大龍小5年のときには彼にはれっきとした彼女がいた。鹿児島駅前に住んでいたフクシマケイコという女性だ。彼女もまた年よりずーっとませた娘だった。中学生になってから大平に聞いた「はくいスケ」フクシマケイコとの話はあまりにリアルで非現実的な話なのでいまでも「作り話」と思っている。ぼくを羨ましがらせる為の……

浜崎隆くんにペアリングしてぼくの脳裏にひっかかっている曲はと言えば何と言ってもロックンロールだろう。初期のエルヴィスナンバーが彼のボディアクションと共に甦ってくる。「冷たくしないで」など。本当はその直前、映画『暴力教室』の主題歌として登場したビルヘーリーと彼のコメントの『ロック・アラウンド。ザ・ロック』と『シェイクラップンロール』だった。そのあとあの有名なエルヴィスのロック『ハートブレイクホテル』だったように思う。すべてが隆の十八番だった。



ふと思い出してスマホに保存している「My favorite song collection」から『ハートブレイクホテル』を聴いてみた。この曲1956年にエルヴィスがサンレコードからRCAレコードに移籍して最初の曲だった。そしてぼくが高校時代初めて自分で買ったSP盤でもあった。

本当に擦り切れるほど聴いたものだ。B面に入っていた『I was the one(ただひとりの人)』も後年、もう一度聴きたい自分の曲第1位にあげるほどお気に入りの曲である。というのは大ヒットしたハートブレイクの方は以後も何度もテレビ。ラジオでながられていたのでさほど懐かしさを感じなかつたからだと思う。

たからだと思う。

またハートブレイクホテルと言えば小坂一也を忘れるわけにはいかない。アメリカで大ヒットしたその年に早くも小坂一也は自分のバンド「ワゴンマスターズ」を引き連れてこの曲で日本に和製ロック時代の扉を開いたといっても過言ではない。



彼の唄い方はもともとカントリーシンガーなのでとてもエルヴィスのような元気のいいロックのリズムには程遠い唄い方だったけどそれはそれなりに僕たちは大いに受け入れたものだった。

大学の頃の仲間が多いが兄の友達(名前は忘れた)が唄っていた裕ちゃんの「男の横丁」も懐かしい。

相本の従姉妹のかっちゃん(カワいい共立高校1年生)は飯田久彦の「ルイジアナママ」そして名古屋のサー坊は「東京ナイトクラブ」「マヒナスターズ」と続いていく。

美容師の先生時代に次々に代わる店のスタッフ(16才から23才ごろまで)の顔もその時代を共有した歌手やグループがくっついているから面白い。沼田聖子とドリームズカムトゥルー。大重?と「しおさいの詩」ところで不思議なことに、60代以降に数知れない中国人朋友たちと付合ったけど何故か名前とすぐ浮かんでくる音楽はない。

最初に書いた車を運転している時の人で何故その場所と、どうしても解けない人の名は????である。もう説明が長くなるので彼女のことは忘れて下さい。車が左折するとすぐ近くに隠れ家のようなホテルがあったようななかったような。